

## アンハードノートピアノパラ委員会 名誉会長

### 日野原重明先生 の逝去に臨み

アンハードノートピアノパラ委員会

会長 迫田時雄  
最高顧問 羽田孜

あれは2004年のことでした。世界で初めてのピアノパラリンピックを立ち上げるために様々な苦勞をしていた時、先生にどうしても相談に乗っていただきたい、そして私たちの運動の名誉会長をお引き受けいただきたいと、づうづうしいお願いをFAX一枚に書いて送信したものです。

1両日して、思いもかけず聖路加病院の理事長室の秘書、山本様から「OKです、とおっしゃっています。」と電話があり、急いで面談に伺いました。「とてもいい企画だ。できるだけの協力をしましょう。」「ただ僕は色々頼まれて、引き受けている団体も多いし、スケジュールももう5年10年先まで決まっている」と先生の有名な5年、10年手帳をお見せいただいた。

2005年1月9～10日の2日間、世界でも初めての第1回「ピアノパラリンピック in 横浜」を迎えた。確かその時は既に先生は94歳をむかえておられたと思う。正直私もこの寒い時のご出席は無理かもしれないと覚悟はしていた。会場は、横浜市ご自慢の「みなとみらいホール(小)」。ところが開会一時間前には用意していた控室にお入りになられた。

一見してだれでも日野原先生だとわかるお姿に、みんなの注目は集まり、ご高齢にも関わらずしっかりした足取り、よどみのない流れるようなお話しぶり、知的に輝く、人を包み込むような優しいまなざし、先生の周りにオーラが広がり、そのおかげで周りの者も生き生きとはたらいたものです。

ボランティアの分も含めてまとめて一緒に取り寄せたお弁当も、おいしそうにぺろりとお食べになったのには驚いた。

開会式のごあいさつで「第1回ピアノパラリンピックの開催をお祝い申し上げます。そしてこの情報がさらに世界に発信されて、第2回ピアノパラリンピックが、世界のどこかで始められることを私は心より期待します。」というお言葉を力強い口調でお延べ頂いたことを、私の使命としてしっかり受け止めさせていただきます。

今でも忘れられないのは、2014年2月15日、私どもが その前年2013年11月「第3回ウイーン大会」を成功させ、そのメダリスト達を東京に招待し、代々

木の「オリンピックセンター」で「ウイーン大会メダリスト紹介特別コンサート」を開催した時のことです。

正月になってすぐ、突然宮内庁からお電話を頂きました。

「皇后さまがぜひお聴きになりたいと仰せられている、対応できますか？」驚きましたが、こんな名誉なことはありません。

早速日野原先生とも相談し、ご指導いただきながら慎重に準備を進めること、さらに先生ご自身で皇后さまの御接待役をお引き受けいただくことになりました。

もちろん演奏者の ドイツ、ルーマニア、メキシコ、台北、そして日本のメダリスト達、更にそれぞれの国の大使館にも緊張感が走りました。

さて、ところが開会 1 週間前になってからのことです。

降り出した雪がなかなかやまない。東京中が大雪に見舞われ、首都交通は麻痺状態。

海外からのメダリストたちは、用心の為に 1 週間前に到着の予定が、羽田空港が雪の為に使用不能になってしまいました。

後で聞いたところによると、特にメキシコのデービッド君たちの乗った飛行機は数時間上空で待ち、数回着陸を試したけれども危険だということで、結局名古屋に向かい、そこで一泊、あくる日の 1 番の新幹線で東京へ着きました。

おかげでその間僕も一晩中羽田空港ロビーで過ごすことになってしまいました。それでも天気のリcoveryはうまくいかず、引き続き準備の為に私もオリンピックセンターに泊まり込みでした。

有り難いことに当日の朝になってやっと小降りになり少し日差しも戻ってきました。

ほっとしたのも束の間、東京中に膝まで積もった雪をどうするか！

皇后さまのお見えになるコースは何遍もリハーサルをしていたので、早朝から館員総出で車路の除雪に懸命になった。

そのうち日野原先生からも電話があり、大雪で車がうごかない、タクシーを頼めないか？とのこと。しかし、どこのタクシー会社も電話はパンク状態、宮内庁や皇宮警察、警視庁からもたびたび電話があり様子を見ることになった。

その混乱にも関わらず三々五々着飾ったご婦人方、紳士方もご到着になりはじめた中で、お昼前になって、侍従長様からお電話がありました。

「皇后さまは早くから支度され準備されておられましたが、宮城を出るのに職員が車路の雪かきに苦勞しているのをご覧になり、気の毒にお思いになり、残念だが今回は見送りましょう。とおっしゃっている……。この次はアメリカと聞いている、その時に又期待しましょう。とのことです。」と丁寧なお知らせを頂きました。

そうこうしているうち日野原先生も何とか無事にお着きになり、皇后さまのことをとても心配され「こういう緊急時には、(皇室にもしものことがあるといけないので)こちらからご辞退申し上げたいと連絡するものですよ」とご注意いただいたのが印象的でした。

コンサートでも、ステージに立たれ自らマイクを握って、会の主旨と来場のお客様にねぎらいのお言葉を述べていただきました。私も感極まって言葉も出ないほどでした。

その後も 100 歳を超されてから、さすがに車いすをお使いになることはありましたが、演壇に登るときは、ご自分の足でしっかりお上りになり、例のいつも目の前にいる人に語り掛けるような、そしてユーモアを忘れない話しぶりで会場を和ませていただいたものでした。

1 世紀以上にわたって常に私たちをリードし、励まし続けてこられた方。

そしてご自身自ら生き方の範をしめされるというまれにみる人。成長した国家の知性の在り方を示し、世界中の誰からも愛され、尊敬され、良心のシンボルとして私たちと共にいらしてくださった先生。その温かい思い出はこれからも私たちを包み続けることでしょう。

生と死、その境界を感じさせない生き方を私たちにお示しいただいた先生！  
ありがとうございました。

私は あえて「さようなら」は申し上げないつもりです。

この運動で育った世界中の子供たちを、これからもどうぞお見守りください。

2017 年 7 月 27 日



写真は 2 年前「 山上の光賞」を頂いた時のものです。

中央が日野原先生、右隣が細川元総理夫人、右端が迫田です。